

美術の窓(44)

松浦屏風について

大和文華館 吉川逸治

大和文華館には国宝四点、重要文化財三十点を数え、これらと列ぶ数多くの優秀な文化財を所蔵しておりますが、そのなかでも、この江戸時代前期に描かれた「松浦屏風」は、収蔵品を代表する名品とされています。国宝に指定されましたが、京の町絵師の作で、作者は知られず、あの有名な「彦根屏風」のように鋭い観察眼と見たところを適確に記すという筆意を誇る作風も示していません。また、狩野派の誰かなどと思わせるような当時の名流の筆法など想わせるところは少しもありません。無名の町絵師の作品ですが、緻密克明に型通りに筆運び、色鮮やかに婦人の衣裳を写し描いておりますが目立ちます。

この方面に携わっていた絵師の作とも推測して、染織工芸史の専門の方々に検討していただきましたところ、衣裳の模様の描写は必ずしも忠実に行なったものではなく、自由な態度で行なわれた描写らしい誤りが混じっていると指摘され、衣裳の模様から年代を推定することは難しいが、この点も参考にして前述のごとく江戸時代前期、寛文年間(1661~1673)あたりかとの推測でございます。いろいろ不十分な点が指摘されますが、初代館長矢代幸雄が京都の一美術商の所で見出して、感心して直ちに収蔵品のうちに加えたもので、その後、国宝、重要文化財の指定会議に提案して、国宝と指定されたものです。

初代矢代館長は、日本美術史の作品には仏教関係を除いて、大形の間像を取り扱ったものにとぼしい。西洋の美術では、ルネサ

ス以来、大形の間像でもって自己主張しているのが通例だと言って、日本の世俗関係の美術にも、大形の間像表現を求めておりました。したがって、この「松浦屏風」に出会った時は、よろこんで求められたことは前述のごとくです。これは「婦女遊楽図屏風」一双という題で、風俗屏風の部類に分類されます。しかし、「松浦屏風」は、ただ、ある昼下がりのひと時、遊女やかたの広い座敷に打寛いで集う遊女らの姿を写しあらわした風俗画に相違ありませんが、その設定にはなかなかの苦心を重ね、工夫を凝らして、造形的にも、心理的にも、おそらく人生観の思考も混えて、作画している様子です。彼女らの先輩たちを取り扱った「繩のれん」風の遊女を描いた肉筆浮世絵流の単調な色慾一途の関心事とはちがいで、もっと複雑な心境がこの「婦女遊楽図屏風」一双の各画面のうちに屈折して、たたみ込まれます。

十八人の婦女たちは、対話する一対の人たちを単位とし、右隻に八人、左隻に十人を配置します。右隻の末端には碁盤碁石を置き、漢字の列で飾られた厚手の打掛けを二つに畳んで衝立として、その前に地味な黒い着物の上に白い打掛を羽織って、女主人公らしい人物が大きくすわって、うしろから点々と野草の模様をつけた暗紫色の土色の着物をきた少女が、女将の黒髪を束ねて、髪を結っています。そこへ左下手から上がってきた門番の女が暗緑色の着物を着て、慎しやかな物腰で、両膝ついて、端近いところに前かがみにすわって、何か書状らしい紙片を奥にす

わる女将に差し出します。秘かなドラマが始まろうとする。女主人は緊張した無愛想な表情ですが、両手は神経質にふるえているようです。門番の女性も、やや気を締めて相手の顔を見つめます。彼女の腰に下げた鍵束がぶつしりと重そうに見えます。一方、髪を結っている少女も顔をあげて、眼を見ひらき、二人の仕草と彼女らの交わす言葉に注意している様子です。

うしろに立っている薄い黒色の簡素な格子縞の着物をきた女性は、右手を腰のところにあて、着物の端を握りしめ、沈んだ表情で左側に集う六人の女たちを黙って見つめています。左手は、頸にかけている首飾りを触れながら右襟のところまで伸ばしている。この首飾りには、もとは小さな十字架の徽章が垂れさがっていたのが、後に消し除かれたと言うのである。これがドラマの源なのか、といふかることもできましよう。彼女の左側では、細かい幾何学模様の着物をきた女性が立って、両手で手紙を拡げて読もうとつとめています。その前にすわる女性は、三味線を膝にのせて、糸の音色を調べるのに夢中です。彼女の羽織を覆う蔓の葉を散らした模様も、鎮めるような趣向です。

屏風の左側に移って、私どもの注意は、三味線の女性のうしろ、そこに立っている二人の女性の姿とその仕草に注がれます。その左の大きい斜めの格子模様をつけた白っぽい着物をきた女性は、右側に立つ黒っぽい地色の上に小さな金色の輪を作る龍の模様を散らす衣裳を着けた女性の肩に手をかけて、身近に引きよせ、小声ですぐ

足元に跪いて、ギヤマンの器を両手に捧げもって、前に立っている黄色い衣裳を着けた女性に差し出している少女を指さしながら、ささやいている。黄色い衣裳には立波に兔が飛び跳ねている模様で、これから何か起こる予兆なのかもしれません。本人の短い下げ髪の女性は、跪く少女の頭に手を置いて、静かにと静止しながら、歩みを遮られた本人は、遠くを見つめながら心のなかの動きを観察しているという様子です。この一隻の屏風の場面は、右側の質素な薄黒色の格子縞の着物をきた女性の沈痛な表情が全体の婦女子たちの気分をも左右している如く思われ、何か閉ざされた重い雰囲気支配しています。悲しみか愁いの感情が漂っている様子です。

これに対して、左側の一隻の屏風では、同じように質素な格子縞の、しかし淡紅い着物をきた女性が対照的な存在として目立ちます。彼女は小さい手鏡をもって口唇に紅をさして少々品がないほどに笑っています。彼女のうしろ、屏風の左端には、静かに二人の少女が向かい合ってすわって、カルタをしています。運勢を見ているのでしょうか、楽しそうです。しかし、この屏風の主舞台は、さきの淡紅の着物をきた女性の前にいる華やかに着飾った五人の女性、それもすわっている少女二人は脇役で、左側の少女は大きな立派な視箱の蓋をかけて、筆をとり、紙を左手で支えながら何か書き記しているところ。彼女はここでもう一度、琴棋書画の屏風の系統を踏襲するものだと主張しているかのようです。もう一人のすわっている



少女は、長いキセルに煙草をつめて、晴れがましい青い衣裳をつけて立っている女性に手渡そうとしています。衣裳の青い色は天空を意味するのでしょうか。さまざまの豪勢な鳳凰が数々の扇が吹き散るなかを下から上まで飛び舞っています。彼女自身も幸福の絶頂にいるのでしょうか。彼女の前にいる女性二人も、悠然とした物腰で、幸福な朋輩でしょう。画のまんなか立つ美女は、一番豊かな祝宴の幕飾りの模様を写した意匠を着物につけて、派手な身振りで全体を威圧します。彼女とさきの青衣の女性の間立つ女性は、橋の欄干の模様をつけた打掛の間から、垣間みせる着物のデザインは半開きの扇を連ねたもので、彼女の役目を示しています。も一度手前にすわる少女を振り返ってみますと、水を意味する彼女の薄青色の着物に描かれた白い蛾の群は、水面に漂う蛾の死屍の群に他ならないので、この幸福な喜びの笑いに満ちた場面に不吉な予告をもたらす徴のようです。そして、彼女からキセルを受けとる青衣の女性の衣裳にも妙な獣が見え隠れしています。彼女の肩のあたりに猫のようなわいらの頭が口をあけているのです。幸福の祝宴のイメージを想わせるなかに、何か不吉な前兆がひそんでいる様子です。すべて幸福のなかには禍の種がひそんでいると言うのでしょうか。これが画の心なのでしょう。無名の絵師は、制作のなかに知的反省の機縁をひそめていたのでしょうか。知的遊戯でしょうか。これも時代の反映でしょうか。いつの時代でしょうか。薄墨色の簡素の縞格子

の着物をきた女性の金鎖の首飾りに下げていた徽章が荒々しく消し去られた痕がいまも残っています。この消された痕を見つめると、消された下げ飾りは何であったか認めさせる意図があったのでしょうか。そして消された徽章の謎をとくことは、この屏風の成立の事情をとくことになるでしょう。消された徽章が十字架であったとするならば、キリシタン宗禁止令、迫害という苛烈な現実の数々の波瀾の過ぎさった後、残されたその精神的幻影が、その後の現実生活のうちに生き続ける境遇のなかで、全く無縁な美女のやかたの夢のうちに京の町絵師の一人がこのような制作を描き上げたものでしょうか。この美しい屏風は成立の謎がまだまだ解けないと思います。とにかく、この屏風絵に、作者の絵師は彼らの有する絵の秘術を尽くして描き上げたものであることは確かであります。

この屏風絵の芸術は、素材である金箔の平面を尊重した二次元の絵画で、岩絵具の色彩美を率直に使用し、発揮することに努め、従来通りの大和絵の芸術を忠実に守って制作しています。彼は、キリシタン宗が導入した当時の西欧の絵画の技術をもちいず、また絵画の三次元的空間構造の導入法も顧慮せず、従って陰影法による墨、淡墨の適用もおこなわず、中世以来、伝統的に継承されてきた二次元構造の色彩本位の日本絵画の技法を徳川時代の前期まで守り続けてきたのです。

季刊 美のたより No.100

平成4年8月13日

発行 大和文華館